

初期語彙の名詞優位性とサンプリング方法*¹

宮田 Susanne・西澤弘行*²

Noun Bias in Early Vocabulary Development and Sampling Methods

Susanne Miyata & Hiro Yuki Nisisawa

A. 日本語の初期語彙における名詞優位性とその原因

子どもがことばを獲得し始めるとき、その語彙の中で名詞が圧倒的に多いと言われており、英語に関しては立証されている(Goldfield & Reznick 1990等)。しかし韓国語、中国語(北京方言)については互いに矛盾する報告が提出されている。Tardif (1996), Tardif, Shatz, & Naigles (1997), Choi & Gopnik (1995) は両言語において動詞のバイアスを観察し、それを言語特徴で説明している。すなわち、韓国語も、中国語も項の省略を許す言語であり、さらに韓国語の場合はverb final言語である事も加わって動詞が自然に強調されるので、動詞の方が獲得されやすいという説明である。日本語も韓国語と同じ特徴を持っているので、同様の動詞バイアスが予想される。

しかし、いくつかの調査(Miyata & Naka 1997, 1998, 宮田・中・西澤, 1999, Oshima, Naka, & Miyata 1997, 桜井1998, 山下1995) が示しているように、かなりの個人差はあるが、日本語の子どもにも名詞バイアスが見られるようである。韓国語についても上述の動詞バイアスとは異なった結果も報告されている(Pae 1993, Au, Dapretto, & Song 1994)。

ここで2つの問題を設定することができる。第1に、初期語彙における名詞と動詞の割合の差が本当に存在しているのか、それともデータ収集と解析の方法によって作られたものなのか。本研究ではこの問題について、サンプリング方法を検討する。第2に初期語彙の割合の差が本当に存在しているならば、それが言語タイプによるものなのか、それとも個人差、つまり、子どもと親の特徴が主な原因であるか。

第2の問題に対しては、宮田・中・西澤(1999) がタイムサンプリング(観察)によって4

* 1 This research was supported by a grant in aid for scientific research (09834009) from the Ministry of Education, Science, Sports and Culture of Japan, as well as the 1997 Research Aid of Aichi Shukutoku Junior College.

* 2 Tokiwa University

人の母親によるインプットを2つの時点（1才2ヶ月時と、語彙が100語を超えた時点）で調べている。3人の母親では動詞よりも名詞が多く使われていた（名詞率；以下はn/v率と記す：1.23；語幹数）。この率は、子どもの語彙が増えはじめるとさらに上がる（n/v率2.1）。

4番目の母親は名詞率がやや低く（n/v率0.95）、語彙増加の時期には逆に下がる（n/v率0.42）。母親の実際の行動の特徴を見ると、ほかの母親が徹底的にもの名前を教えていたり、尋ねたり、繰り返したりするのに対して、この母親にはこのような命名行動がほとんど見られず、むしろ子どもといっしょにシナリオを作って遊んでいる。この子どもの言語発達は語彙リストだけから見ると、ほかの子どもと比べて遅くなっている。後者では1才半頃に100語を超えたのに対して、前者ではこの時点が2才頃である。この母子のコミュニケーションスタイルを対象に、より細かい分析を行わない限り、母親の話し方がどのような影響を及ぼしたのかは分らない。しかし、今のところ、母親が名詞をたくさん使っていると、子どもが名詞優位になり、逆に母親が動詞をたくさん使っていると、子どもが動詞優位になる、という直接的な因果関係ではないということしか言えない。むしろ子どもの言語発達に合わせたインプットのファインチューニングの問題である可能性がある。子どもが物の名前に対して敏感になった時に、それに応じて物の名前を教えてやる結果、子どもの語彙の急増（vocabulary spurt）が起こる、ということが考えられる。

B. 初期語彙の収集方法

このような問題を調べるためにはいくつかの言語の幾組かの親子のデータが必要である。しかし今まで行われてきた研究をみると、それぞれが初期語彙を調べるために独自のデータ収集方法を使っているために、比較が難しくなっている。上で述べた、互いに矛盾する結果は部分的にはデータ収集方法によるとも考えられる（Pine, Lieven, & Rowland 1996）。データ収集方法には基本的に次の3つの方法が考えられる。

- a) 親による報告（チェックリスト）
- b) 親による常時記録（日記データ）
- c) タイムサンプリング（観察セッション；録音録画）

a)のチェックリストとして、CDI (The MacArthur Communicative Development Inventory 1993, 日本語版は小椋・綿巻, 印刷中) がよく使われている。母親が、約700単語を含むリストの中で子どもが使っている単語をチェックする、子どもの話し方に近い文型を選んだり、最も長い文を3つ記入するなどの形式で、特にアセスメントや横断研究のために使われている。本研究では日本語版CDIを元にした語彙リストを使用した。このような調査法では累積的な語彙が収集され、子どもがすでに使わなくなっている単語も含まれている可能性がある。さらに、母親の観察力、記憶力が結果の質にかなり影響することが考えられる。母親の記憶に名詞バイアスがある（Pine 1997）ことも考えられる。

b)のような日記データには二種類あるが、一つは研究者が親に依頼した単語記録である。発話された単語のほかに、その解釈と場面が記録される。この方法も親の観察力に左右される。もう一つは研究者である親による日記記録である（例：野地1973-77，横山1989）。どちらの場合も、記録した後に再確認不可能である。（例外的に、横山の研究は日記のほかに録音も残された優れたデータである）。

c)の場面観察はa), b)と違って再生が可能で、親子の言語行動の細かい分析も行うことができる。しかし、タイムサンプルであるため、その時点の、子どもが使っている語彙の一部しか収集されない。場面が限られるし、子どもが知っている単語を全て発話するとは限らないからである。

いずれの方法も実際に初期語彙の調査に使われているが、c)が収集できる語彙数に限りがある代わりに、解釈と分析方法が一貫しているのでケース間の比較が容易であるのに対して、a), b)は、もっとも緊密に子どもと接している親による資料なので多くの語彙が収集できる代わりに、研究者によるものではないので、それぞれ親毎に異なる解釈が行われる可能性が有る為に比較が困難である。

C. 調査対象と方法

1997年8月から、4人（1996年5月～6月の間に生まれた男子2名[TAT, TOO]，女子2名[MIC, MAJ]）とその母親を対象に、親子の自由遊び場面の60分のビデオ観察を2週間毎に行っている（継続中）。さらにCDI (ibid.) の日本語版 (ibid.) を元に作成した単語表に対して、母親に毎回、子どもの語彙を記入してもらった。本研究はそのデータの一部を元に、単語リストと観察で得られた語彙の品詞割合の比較を行う。

本研究で用いた単語表は以下の3つの点でCDIと異なっている。

1) CDIは「わかる」と「わかる／言う」という形式で理解と産出を個々に、バイナリーチョイス（記入有り無し）求めている。本研究で使われた単語表では、理解に関しては5段階評価（1「わからない（無記入）」，2「ひょっとしてわかる」，3「わかるような気がするけど，自信がない」，4「たぶんわかっているでしょう」，5「確実にわかっている」）で評価を求めた。これは母親に解釈の余裕を与えるためである。子どもが実際にどこまで理解しているかが、不明なときもある。そのときに、母親がバイナリーチョイスで理解しているか否かを決めるには無理がある。さらに言語発達の遅い子どもの母親に成功感を与えるという副次的効果もある。

2) 理解の5段階欄のほかに「変形」という欄を付けた。これによって、単語表に含まれていないバリエーションも捕らえると期待した。例えばCDIでは「シュポッポ」が含まれているが「キシャポッポ」は含まれていない（ほかの例はデンシャ（含），キシャ（含）と，キカンシャ（無），シンカンセン（無），あるいはショウボウシャ（含）ショウボウジドウシャ（無）

である。このようなfamiliolectによるバリエーションが漏れなく捕らえるようにこの「変形」欄を加えた。

3) 初期語彙の調査が目的であったため、文法発達に関する項目を利用しなかった。

観察は8mmビデオによる録画およびMDによる録音によって行った。研究者は子どもの自宅で器材をセットし、録画／録音をし始め、母親にテープが止まるまで子どもと遊ぶことを頼み、去る。トランスクリプションはJCHAT／WAKACHI98で行い(Oshima-Takane/MacWhinney 1995, 宮田・中1998), 解析にはCLAN (MacWhinney1995) と形態素解析プログラム JMOR (中 1999/3) を利用した。

本研究は語彙の急増 (vocabulary spurt) までの4人の単語表の結果,そしてその期間でもっとも速く発達した1人の観察データ (1才2ヶ月から1才8ヶ月, 月に1回, 7セッション) をもとに行った。この4人はA.で述べた (宮田・中・西澤1999のインプット調査で使われた) 子どもと同一の子どもである。

D. 単語表の結果：ダブルチェック現象

4人の子どもの品詞率を見ると (図1～8), 発達の速度は異なっているが, すべての子どもにおいて名詞 (n) が圧倒的に多いことがわかる。その次は「その他」であり, ここでは特に擬態語擬声語 (例: トントントン) と挨拶 (例: バイバイ) が多い。固有名詞 (例: パパ) もこのグループに含まれている。それに対して, 動詞 (v; 例: タベル) と動作名詞 (vn; 例: ネンネ) が少なく, 増加もわずかである。4人とも名詞優位であって, 語彙の急増も名詞における語彙の増加である (noun spurt)。

単語表を分析した際, 次のような現象に気付いた。「変形」欄を見ると, 幼児語が記入されていることが多く, 我々が想像していたパターン (シュポッポ→キシャポッポ) より, 「犬」→「ワンワン」が主であった。その幼児語の欄を確認すると, そこにも記入されている。つまり, 子どもが発話した1つの単語に対して, 2つの記入がある。例えば「モーモー」と「ガーガー」のほかに「牛」, 「あひる」にもチェックが入っていて, 「変形」として「モーモー」と「ガーガー」が述べられ, ダブルチェックになっている。この現象が一人の母親ではなく, 全員である程度で見られた。問題になった項目を表1にまとめた。「最大チェック数」は一人の母親が一回のアンケートで一つの単語に対して行ったチェック数である。

ダブルチェックには名詞だけではなく, 品詞を超えたものもあった。例えば子どもの「ボイ」という単語に対して, 「ボイ」, 「捨てる」, 「ゴミ箱」が記録されている。また, 幼児語だけではなく, 成人語にも見られた。子どもが雨の日に雨も傘も「アメ」と名付けた場合, 母親が「雨」と「傘」の欄で記入するなどである。

この現象は「変形」欄があったから生じたのか, チェックリストそのものに潜在的に今までも存在していた現象であるかはここで判断できない。しかし, 可能性として, 母親の子どもの

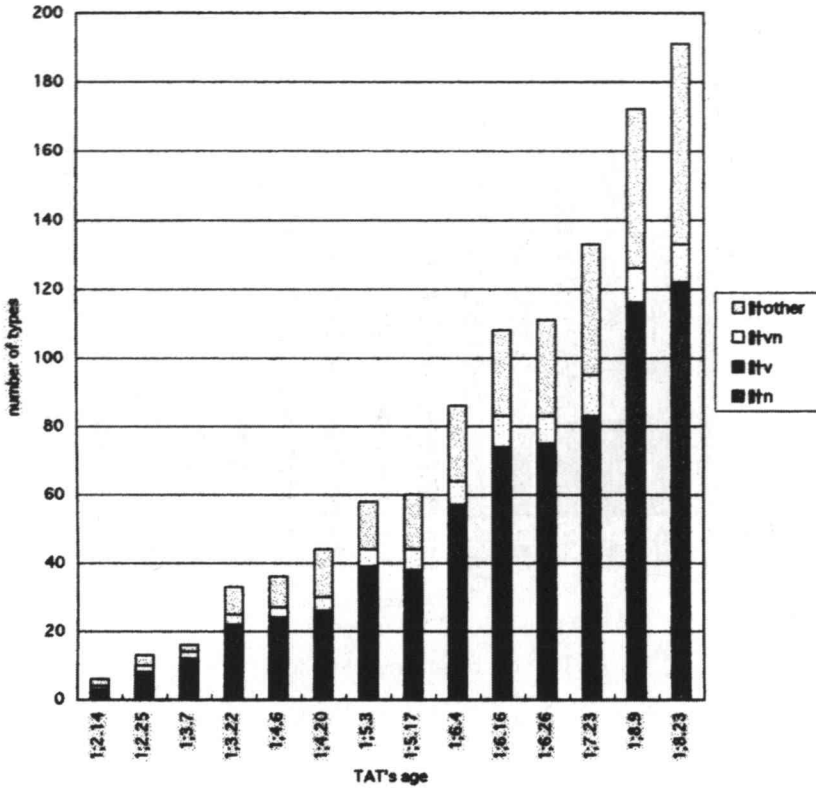


図1 TAT's vocabulary development (CDI data)

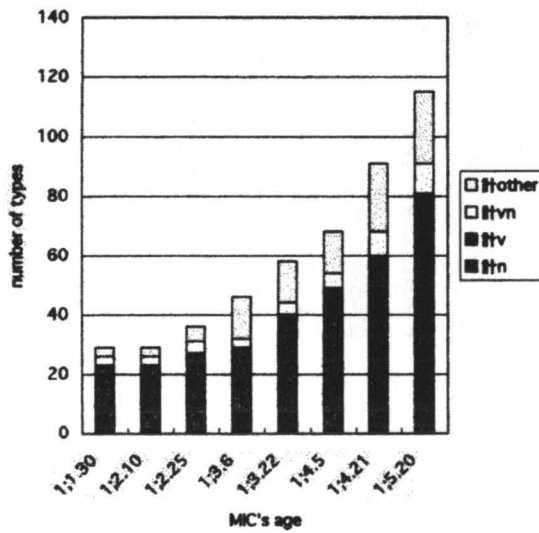


図2 MIC's vocabulary development (CDI data)

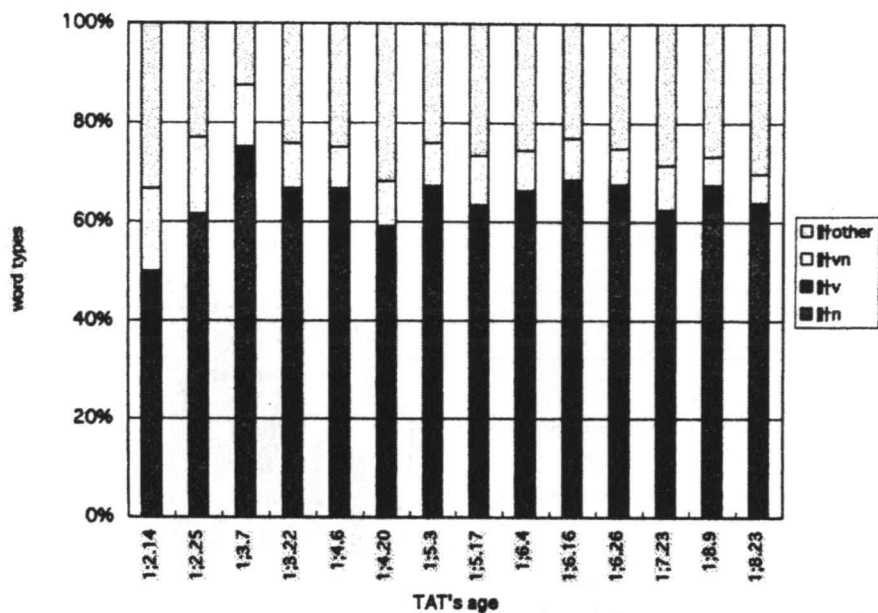


図3 TAT's vocabulary development (CDI data)

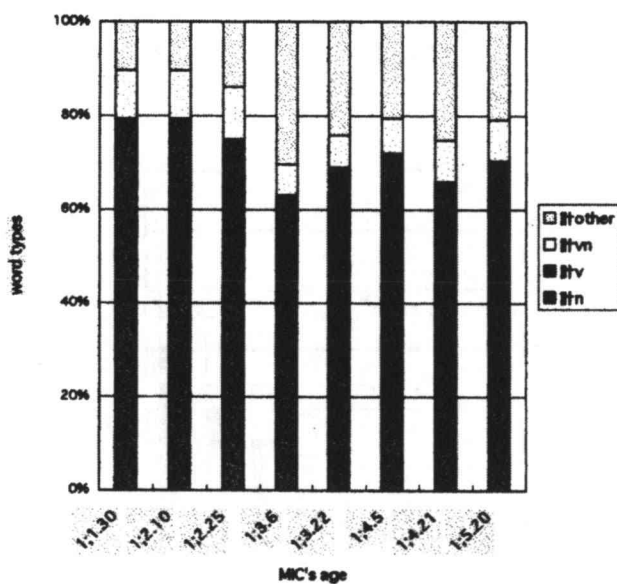


図4 MIC's vocabulary development (CDI data)

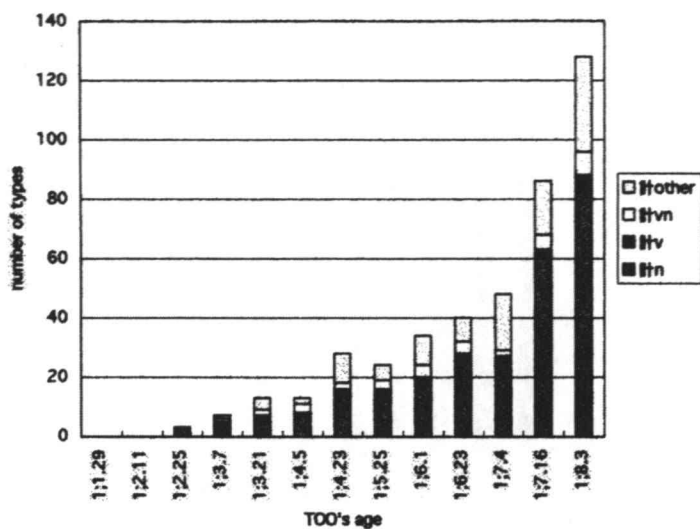


図5 TOO's vocabulary development (CDI data)

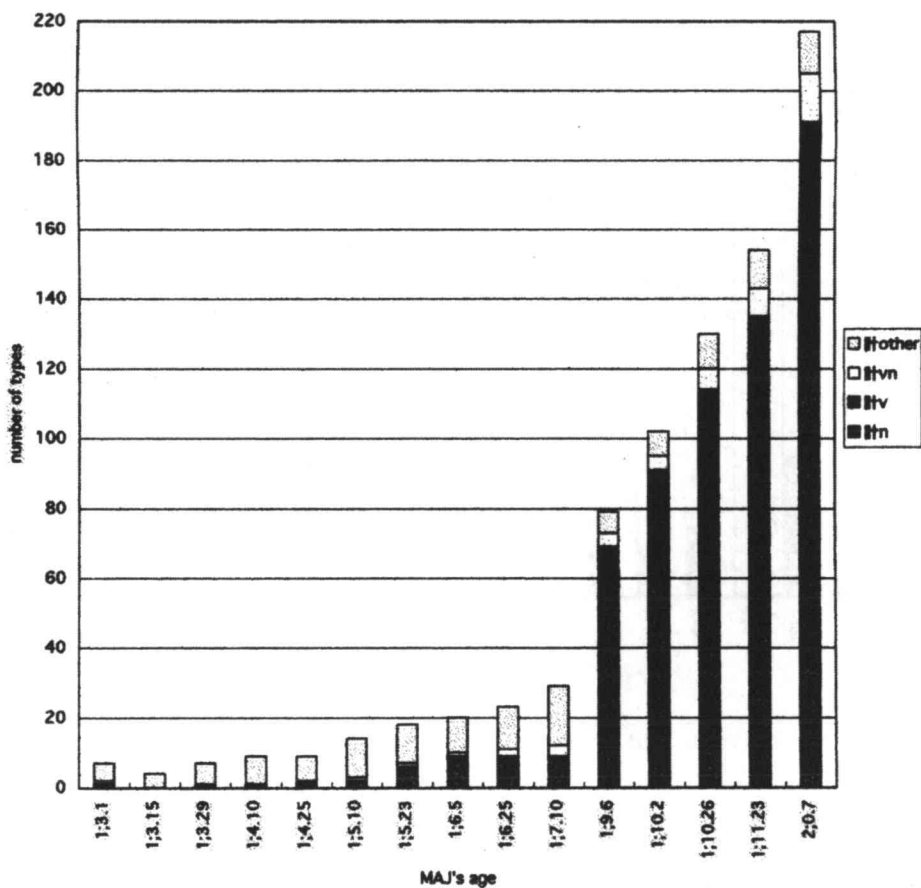


図6 MAJ's vocabulary development (CDI data)

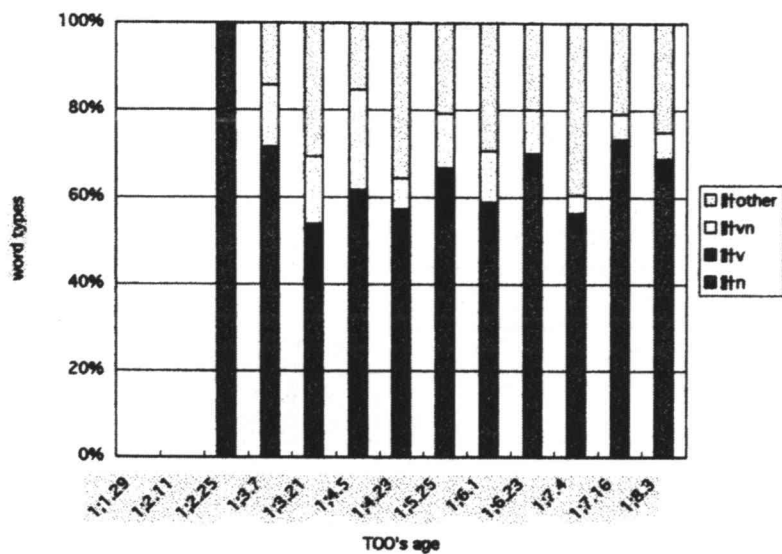


図7 TOO's vocabulary development (CDI data)

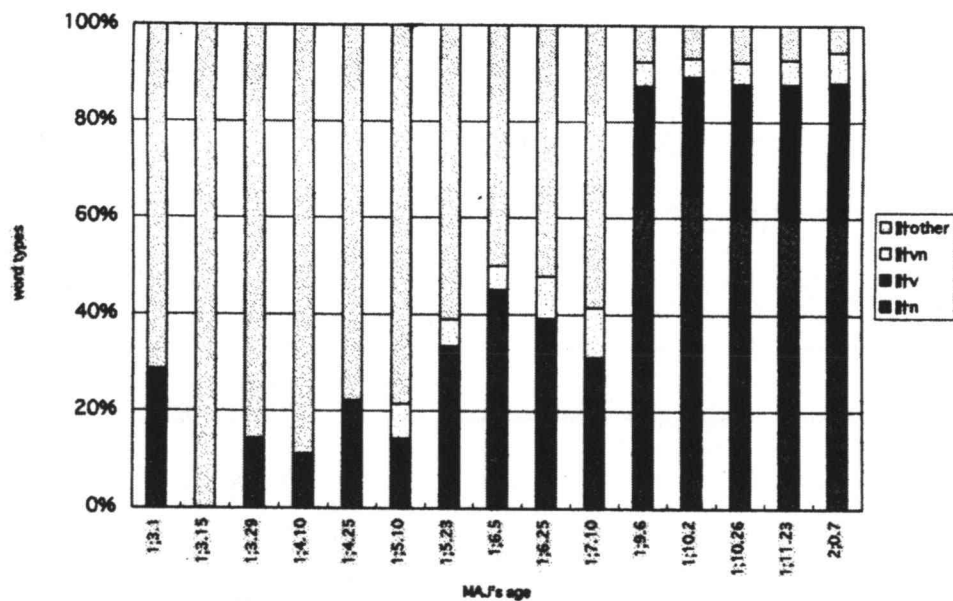


図8 MAJ's vocabulary development (CDI data)

表1 母親が単語表で複数チェックを行った、子どもが発話したタイプ一覧表（4人）

子どもが発声した単語	母親がチェックした単語	最大 チェック 数
A. 幼児語		
ジージ	ジージ, えんぴつ	2
ガオー	ガオー, ライオン	2
シーシー	シーシー, おしっこ, うんち	3
バカバカ	バカバカ, 馬	2
カーカ	カーカー, 鳥, からす	3
メメ	メメ 目 眼鏡	3
クック	クック 靴, スリッパ, 靴下	4
ワンワン	ワンワン, 犬, おおかみ	3
ガーガー	ガーガー, あひる	2
チューチュー	チューチュー, ねずみ	2
ニャンニャン	ニャンニャン, ねこ, ライオン, とら, 犬	4
ポッポ	ポッポ, 汽車	2
ブーン	ブーン, 飛行機, ヘリコプター	3
ブーブ	ブーブ, 車	2
マンマ	マンマ, ご飯, おせんべい	3
モーモー	モーモー, 牛	2
ポンポン	ポンポン, おなか	2
B. 単語表に含まれて いない幼児語		
リンリン	自転車	1
マンマル	お月さん	1
ポッポ	はと, 鳥	2
ガシガシ	チョキチョキ, はさみ	2
パッチー	汚い	1
クルクル	回る	1
フー	吹く	1
エーン	泣く	1
ツルツル	うどん, ラーメン, スパゲッティー	3
パンパン	パンツ, ズボン, おむつ, パン	3
C. 動作を表す単語		
ナイナイ	ないない, 片付ける, 隠す	3
ボン	ポーン, 投げる	2
ボイ	ボイ, 捨てる, ゴミ箱	3
D. 成人語		
ジュース	ジュース, 水	2
アワ	泡, 水	2
アメ	雨, 傘	2
ナイ	ない, 消える, 空っぽ	3

言語に対する意識を表しているかもしれない。つまり、子どもが発話した単語そのものより、名付けた物や行動あるいは表現された概念を元に、母親が記入しているという可能性である。

極端な場合、子どもが「ニャンニャン」という単語を順番に猫、虎、ライオン、そして犬にまでも付けると（この現象はovergeneralizationとして昔から知られているが）、母親が「ニャンニャン」、「ねこ」、「とら」、「ライオン」、「犬」にチェックを行ない、その情報を持たない研究者が、子どもが5つの別の名詞を生産的に使っていると解釈することもありうる。本研究では明らかな場合は、ダブルチェックを排除したが、どこまで一般的な現象なのかは、記入後の面接などでしか調べられない。

1つの対策としては、幼児語をまとめて聞くのではなく、それぞれの成人語と並べて提示する方がいいと考える。さらに記入前にこの点について訓練を行った方がいいだろう。

品詞の割合の研究の場合、このような現象が一般的であれば、特に名詞の数が膨らまされている可能性がある。今回の調査では全部で10個の動詞と42個の名詞がダブルチェックされたが、名詞に生じやすいようである。動詞の場合はそれぞれ一つのケース（一人の母親しかそのダブルチェックを行わなかった、数回であっても）だけだったが、名詞のほうがケース数が多かった。また名詞については同じ単語に対するダブルチェックが複数の母親で見られることも多かったが、動詞については、そのような重なりは見られなかった。

E. 観察セッションの結果：品詞判断の困難さ

観察データを分析する前に、書きおこし（トランスクリプション）がある。この時期の子どもの発音はまだ不明瞭であるし、不安定でもある。このような状況の中では母親の反応は大きな手がかりになる。しかし、母親は子どもの発話を単に繰り返しているわけではなく、解釈しているのである。例えば動詞の場合によく見られることだが、子どもが、何か起きた時に「アチャッチャ」のようなことをいうと、母親はそれに応じて、場合によって「落ちちゃったね」や「来ちゃったね」などと反応する。子どもの発話は動詞に近いようなものではあるが（おそらく過去の母親などの発話の中で目立つ活用語尾である「-ちゃった」が子どもの発話に影響している）、特定の動詞ではないようである。このようなものをどう扱うのか、動詞として認めるのか、それとも喃語として表記するのかがトランスクリプションの段階で決定されるが、これは結果全体に影響を与える。

発音がはっきりしていても、子どもが成人語にはないような独自の単語、すなわち個人語（idiolect）を使うこともある。今回のデータにもこのような単語があった。TATのデータでは3セッションに渡って、数百回「アリ」（[ali]か[aji]、/r/の発音が不安定）が見られる。絵本を見ている場面、あるいは何か発見した時に使われていた。その文脈によって母親がそれを驚きの「ありっ？」あるいは指示名詞の「あれ」として解釈して繰り返すことがあった。これも書きおこしの時に判断する必要がある。

更に、品詞がはっきりしないものもあるが、多くの場合、母親の応答を見ることで、判断ができる。例えば子どもがトンカチを見つけ、「トントン」と言った時に、母親が「トントンあった？」あるいは「トントンする？」と反応したとすると、その「トントン」が母親にとって名詞（物の名前）であるか、動作名詞（動作の名前）であるのかわかる。このような幼児語の使い方にはかなりの個人差もあるようである（familiolect）が、子どもにとってはその使い方がtarget languageになる。また、母親が「アンヨする」という言い方をし、「アンヨ」を名詞（つまり「足」という意味）だけではなく、動作名詞として「歩く」という意味でも使っている例もあった。

特に擬態語擬声語にこのような問題が多い。音のまねなのか、それとも物の名前として使われているのかあるいは両方なのか判断しにくい時がある。この場合、文脈とイントネーションや声の質などのプロソディーを考慮する必要がある。「プープー」と言いながら、車を押していれば擬声語であろうが、その直後もう一つの車を見つけ、同じく「プープー」を言った時は、それは物の名前であるという可能性がある。

このような品詞判断が観察セッションで得られる語彙にかなりの影響を与える。特に初期語彙に多い幼児語や擬態語擬声語の扱いによって名詞や動作名詞の割合が異なってくる。

F. 単語表と観察で得られたデータの比較

観察セッションの結果を見ると、単語表と同様に語彙の増加が見られる。しかし、収集された単語の数は少なく、平均として単語表のほうが2.4倍多いことがわかる。特に名詞が4.1倍という高い比率で顕著であるが、同時に動詞も動作名詞も単語表でより多く捕らえていることがわかる（表2参照）。時期別

に観察セッションの前後に記入された単語表と、そのセッションで得られたデータを比較すると、一番最後の1才9ヶ月のセッションでのみ、倍率が安定しているが、この時も名詞の倍率が他の品詞より高い。全語彙は単語表で約200語近く、観察では約100語である。その前のセッションではかなりのゆれが見られ、発達の初期の語彙がうまく捕らえていないようである（図9～12）。

品詞の割合という視点からみると、両方の方法で名詞のほうが多いことは変わらないが、傾

表2 単語表（14回）と観察（8回）にて得られた単語数の比率（平均；（TATデータ））

	名詞	動詞	動作名詞	その他	計
単語表	45.1	4.9	5.9	20.4	76.2
観察	11.0	2.0	2.4	15.9	31.3
率(表/観)	4.1	2.4	2.5	1.3	2.4

表3 単語表と観察で得られた単語数の比率（時期別；TATデータ）

単語表		観察		率（表/観）				
記入日	語数	観察日	語数	名詞	動詞	動作名詞	その他	計
1;2.14	6	1;2.10	3	no value	1.0	no value	1.0	2.0
1;3.7	16	1;3.8	5	11.0	1.0	no value	0.7	3.2
1;4.6	36	1;4.5	13	6.7	4.0	3.0	1.1	2.8
1;5.3	58	1;5.2	8	16.0	7.0	5.0	3.5	7.3
1;6.16	108	1;6.16	22	5.7	no value	9.0	2.8	4.9
1;7.23	133	1;7.11	59	7.4	2.3	2.4	1.0	2.3
1;8.9	172	1;8.9	41	6.8	8.0	3.3	2.2	4.2
1;8.23	191	1;9.10	99	2.6	1.1	1.4	1.5	1.9

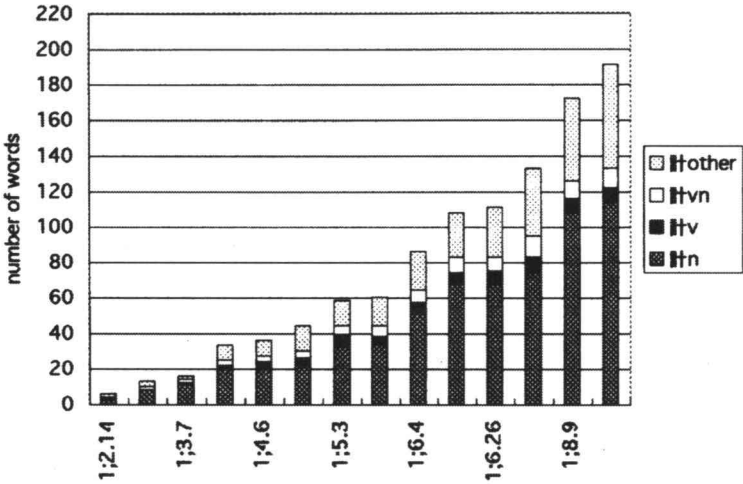


図9 TAT：単語表による結果（単語数：図1と同様）

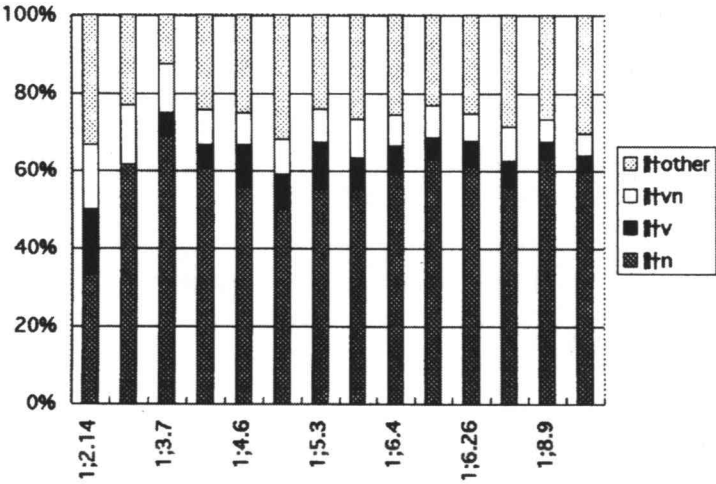


図10 TAT：観察による結果（単語数）

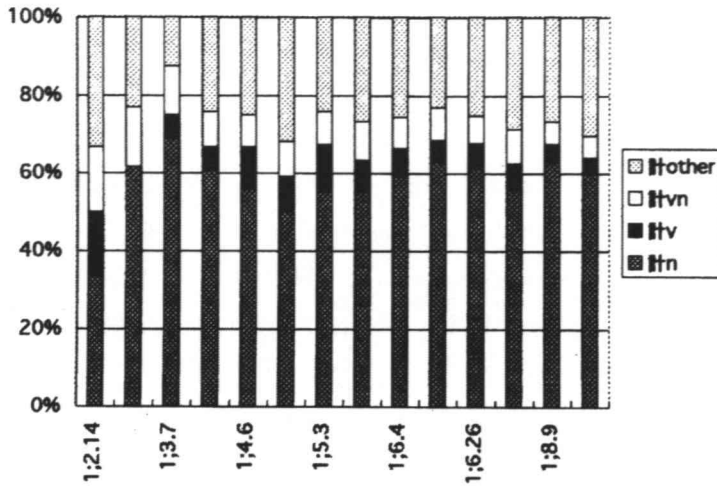


図11 TAT：単語表による結果（割合：図1と同様）

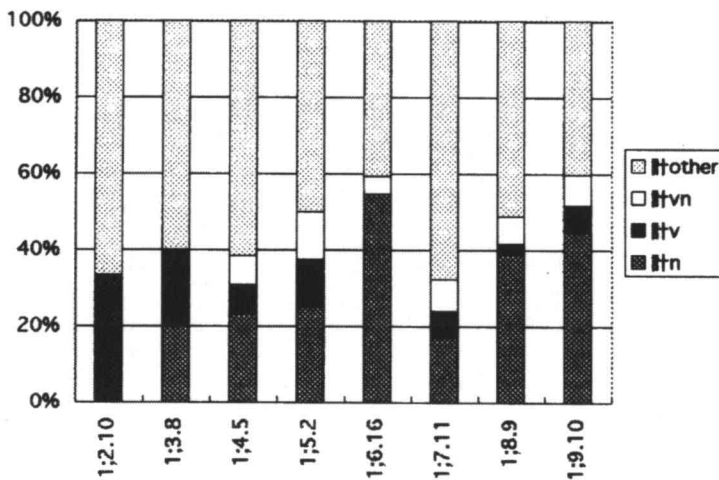


図12 TAT：観察による結果（割合）

向として、観察の場合に名詞が少なく収集されているからか、動詞の割合がやや高くなる。そのほかに「その他」もより多い。それは単語表に含まれていない擬態語擬声語が観察で多く見られることが主な原因である（Eを参照）。

この結果はPine, Lieven, & Rowland (1996) と一致している。彼らは、“The checklist measures seem to indicate that for the majority of the children [...] over 50% of the words in the vocabularies are common nouns. [...] [T]he observational measures paint a very different picture”のように、名詞の割合に大きな差を見いだしている。

TATの場合も最初の単語表以外は名詞が50%を超えているが、観察を見ると、「その他」（主に擬態語擬声語、挨拶、固有名詞）のほうが多く現れる。

G. 収集方法と名詞優位性

Aで述べた先行研究の収集方法を比較すると、子どもが明らかに「名詞優位」であることを報告している研究が単語表（チェックリスト）を利用していることがわかる。逆に、観察や観察と母親の報告（maternal report, 母親に自発的に子どもが発話した単語を書いてもらう方法）を使った研究が動詞優位性や動詞と名詞の同数を報告している。本研究では、単語表のほうが観察と比べて、収集された単語が多く、特に名詞が多いことがわかった。やはり収集方法が品詞の割合の結果に影響したと考えられる。すなわち、チェックリストを使った研究（Au, Dapretto, & Song 1994, 宮田・中・西澤1999, Pae 1993）がはっきりした名詞優位を見出ししているのに対して、観察を使った研究（Miyata & Naka 1997, 1998, 中・宮田・大嶋 1998, 桜井1998, Tardif 1996, Tardif, Shatz, & Naigles 1997）や、観察と母親の報告の組み合わせを使った研究（Choi & Gopnik 1995）は逆に動詞優位な子どもを見出ししている（表4参照）。

対象児の年齢にもかなりの差がある。Brown (1973)をはじめ多くの研究では、言語発達と年齢はそれほど緊密な関連はなく、発達速度が子どもによってかなり異なることが示されて

表4 先行研究での名詞（動詞）優位性と収集方法の比較

対象言語		優位性	対象年齢	子ども数	方法
中国語	Tardif (1996), Tardif, Shatz, & Naigles (1997)	動詞優位	20-22ヶ月	10児	観察（1回）
韓国語	Au, Dapretto, & Song (1994)	名詞優位	15-25ヶ月	4児	チェックリスト
韓国語	Choi & Gopnik (1995)	名詞動詞 同数	14-16～ 18-24ヶ月	9児	母親の報告＋ 観察(3-10ヶ月)
韓国語	Pae (1993)	名詞優位	12-23ヶ月	90児	チェックリスト
日本語	Miyata & Naka (1997, 1998), 中・宮田・大嶋 (1998)	個人差	14-24ヶ月	6児	縦断観察
日本語	宮田・中・西澤(1999)	名詞優位	14-24ヶ月	4児	チェックリスト
日本	小椋・山下・村瀬 マヒュー (1995)	名詞優位	12-27ヶ月	60児	横断観
日本語	桜井(1998)	名詞優位	17-24ヶ月	10児	縦断観察

いるが、Tardif (1996) と Tardif, Shatz, & Naigles (1997) の対象になった子どもの年齢は20ヶ月以上であって、ほかの研究より半年以上年上であった。そもそも、観察によって収集された単語数の少なさを考えると、観察された子どもが傾向としてやや年上になる可能性がある。つまり、チェックリストと観察によって違う発達段階が捕らえていることが考えられる。むしろ、大久保 (1981) が名詞型・動詞型、Nelson (1973) 「referential type」「expressive type」と名付けた現象を表している可能性が高い。

初期語彙に対してより正確なデータを得るためには、Choi & Gopnik (ibid.) が採用している母親の報告と、それをある程度確認する観察セッションを組み合わせた方法が必要である。さらに、母親への適切なインストラクションもしくは訓練が必要であろう。Dでわかったような「子どもが使っている単語」の概念が研究者が期待しているものとは違う可能性があるため、その点についても研究が必要であろう。

文献

- Au, Terry Kit-Fong / Dapretto, Mirella / Song, You-Kyung. 1994. Input vs. Constraints: Early Word Acquisition in Korean and English. *Journal of Memory and Language* 33, 567-582
- Bates, Elizabeth / Marchman, Virginia / Thal, Donna / Fenson, Larry / Dale, Philip S. / Reznick, J. Steven / Reilly, Judy / Hartung, Jeff. 1994. Developmental and stylistic variation in the composition of early vocabulary. *Journal of Child Language* 21, 85-123
- Choi, Soonja / Gopnik, Alison. 1995. Early acquisition of verbs in Korean: a crosslinguistic study. *Journal of Child Language* 22, 497-529
- Choi, Soonja. 1997. Language-specific input and early semantic development: evidence from children learning Korean. In: Slobin (ed) *The crosslinguistic study of language acquisition*. Vol. 5, 41-133
- Gentner, D. 1982. Why nouns are learned before verbs: Linguistic relativity versus natural partitioning. In: S. Kuczaj (ed). *Language Development..* Hillsdale, pp. 301-334
- Gopnik, Alison / Choi, Soonja. 1990. Do linguistic differences lead to cognitive differences: A cross-linguistic study of semantic and cognitive development. *First Language*, 10, 199-216
- Hampson, June / Nelson, Katherine. 1993. The relation of maternal style to variation in rate and style of language acquisition. *Journal of Child Language* 20, 313-342
- MacWhinney, Brian. 1995. *The CHILDES project: Tools for analyzing talk..* Hillsdale, N. J. : Lawrence Erlbaum
- MacWhinney, Brian / Snow, Catherine. 1990. The Child Language Data Exchange System: An update. *Journal of Child Language* 17, 457-472
- Miyata, Susanne / Naka, Norio. 1997. Early development of children's vocabulary in Japanese. *Osaka Gakuin Daigaku Kokusai Ronshuu*, 8, 2, 1-13.
- Miyata, Susanne / Naka, Norio. 1998. Verb-noun ratio and acquisition style in Japanese children. *Bulletin of Aichi Shukutoku Junior College* 37, 219-228
- 宮田 Susanne・中則夫・西澤弘行 (1999) 「期語彙における名詞/動詞優位性と母親のインプット」日本発達心理学会第10回大会発表論文集pp.
- 中則夫・宮田Susanne・大嶋百合子 (1988) 「日本語語彙の習得と動詞の意味、項構造との関連」第4回JCHAT年次大会配布資料紙集
- Nelson, K. 1973. Structure and strategy in learning to talk. *Monographs of the Society for*

Research in Child Development, 38

- 野地潤家 (1973-77) 「幼児の言語生活の実態 I ~ IV」文化評論出版
- 小椋たみ子・山下由紀恵・村瀬俊樹・マヒューあき (1998) 「日本語獲得児の語彙発達：名詞・動詞の獲得について」第4回JCHAT年次大会配布資料紙集
- 大久保愛 (1981) 「言語習得の方略：名詞型と動詞型」In: Hori, Kazuko / Peng, F. C.(eds). *Aspects of Language Acquisition..* Bunka Hyoron Shuppan, 77-89
- Oshima-Takane, Yuriko / MacWhinney, Brian. 1995, 2nd ed. 1998. *CHILDES manual for Japanese*. McGill University / Chukyo University
- Oshima-Takane, Yuriko / Naka, Norio / Miyata, Susanne. 1997. Early emergence of nouns and verbs: A crosslinguistic study of Japanese and English. Paper presented at the *JCHAT Meeting'97* at Tokyo Woman's Christian University, Aug. 1, 1997
- Pae, Soyeong. 1993. *Are nouns earlier to learn than verbs?* Univ. of Kansas Unpubl. Doct. Diss.
- Pine, Julian M. 1992. How referential are 'referential' children? Relationships between maternal- report and observational measures of vocabulary composition and usage. *Journal of Child Language* 19, 75-86
- Pine, Julian M. / Lieven, Elena V. M. 1990. Referential style at thirteen months: why age-defined cross-sectional measures are inappropriate for the study of strategy differences in early language development. *Journal of Child Language* 17, 625-631
- Pine, Julian M. / Lieven, Elena V. M. / Rowland, Caroline. 1996. Observational and checklist measures of vocabulary composition: what do they mean? *Journal of Child Language* 23, 573-589
- 桜井千佳子 (1998) 「名詞・動詞に関する語彙の獲得について」第4回JCHAT年次大会配布資料紙集
- 杉浦正利・中則夫・宮田Susanne・大嶋百合子 (1997) 「CHILDESの日本語化」月刊言語26, 3, 80-87
- Tardif, Twila. 1996. Nouns are not always learned before verbs: evidence from Mandarin speakers' early vocabulary. *Developmental Psychology* 32, 3, 492-504
- Tardif, Twila / Shatz, Marilyn / Naigles, Letitia. 1997. Caregiver speech and children's use of nouns versus verbs: A comparison of English, Italian, and Mandarin. *Journal of Child Language* 25
- Vihman, Marilyn May / McCune, Lorraine. 1994. When is a word a word? *Journal of Child Language* 21, 517-542
- Yamashita, Yoshie. 1995. *The emergence of syntactic categories: Evidence from the acquisition of Japanese*. Unpubl. Diss. U. of Hawaii
- 横山正幸 (1989) 「幼児による助詞の誤用の出現時期と類型」福岡教育大学紀要38, 225-236